

2. 正しさが暴力に変わるとき、人は沈黙する

居心地の良さは、思考を眠らせる

「居心地の良い場所」とは、安心と共感が保証された空間である。同じ感性や価値観を持つ者同士が集まり、互いを傷つけず、穏やかに過ごすことができる場所。人はそこに安らぎを求め、孤独から救われる。だが同時に、そこには思考の停止という代償が潜んでいる。ぬるま湯の中で、花は咲かない。あまりにも心地よい環境は、創造の条件を奪うのである。

思考は摩擦の中でしか発芽しない。対立や不快さを恐れて避けてばかりいると、人はやがて“違う”に耐えられなくなる。異論や異質を排除する社会では、新しい価値は生まれない。芸術や思想の歴史を振り返れば、革新的な表現は常に“異端”として扱われてきた。迫害や孤立の中にこそ、創造の芽は宿る。にもかかわらず、現代の社会は「心地よさ」を善とし、「不快さ」を悪とする構造を強めている。

その構造の中心にあるのが、「正しさ」という名の同調圧力である。

正しさは、やがて暴力に変わる

“正しさ”は本来、社会の秩序を守るための指針であり、人を導く光であったはずだ。しかしながら、その光が強過ぎるとき、人は目を開けていられなくなる。正義や良識が絶対化されたとき、それは暴力に転じる。善意の名のもとに発せられる「あなたのため」という言葉ほど、恐ろしいものはない。それは、相手を救うように見えて、相手の選択の自由を奪う行為だからである。

そして、その奪われた自由は、奪った側が自己を充足させる燃料ともなる。同調圧力とは、まさにその「善意の顔をした服従」である。

人々は“正しいこと”に従うことで安心を得る。逆らえば、集団の外に放り出されるかもしれないという恐怖がある。だからこそ、たとえ内心では違和感を覚えても、表立って反論しない。

正しさに服従することは、悪に加担しないことよりも容易だからである。正しさに従う人々が、他者を攻撃するとき、それは信念の行動ではなく、不安の裏返しである。